

# 恋しくて

2007(平成19)年5月3日鑑賞(テアトル梅田)

★★★★



監督・脚本＝中江裕司／出演＝石田法嗣／山入端佳美／東里翔斗／宜保秀明／大嶺健一／与世山澄子／平良とみ／吉田妙子／國吉源次／武下和平／平良克之／大濱浩一／富山峯夫／特別出演＝三宅裕司（東京テアトル配給／2007年日本映画／99分）

……おどろおどろしい琉球奇譚『アコークロー』（06年）から一転して、石垣島の高校生たちによる楽しいバンド映画（？）を鑑賞……。石垣島出身で今大人気の「BEGIN」も、高校生だった頃はこの程度のレベル……。そう思わざるえないほど、映画初出演のズブの素人たちが面白い演技と楽器・歌声を……。4人の男子高校生たちに絡む、紅一点、「小便たれで屁こき」加那子のキャラも最高……。『スウィングガールズ』（04年）や『東京フレンズ The Movie』（06年）とはまったく異質の、沖縄発バンドのテイストをタップリと味わおう。

## はじめて観た中江裕司映画

1960年の京都府生まれながら、1980年に琉球大学農学部に入學すると共に、なぜか沖縄に移住してしまった変わりモノ（？）が、中江裕司監督。琉球大学の映画研究会で多くの自主製作映画を作った後、順調に映画監督として成長し、1999年の『ナビィの恋』を全国的にヒットさせた後、『ホテル・ハイビスカス』（03年）、『白百合クラブ 東京へ行く』（03年）と、私も題名だけはよく知っている沖縄映画をヒットさせている。

とは言うものの、私はこの手の映画はあまり大したことはないだろうと思って、それまで観たことがなかったもの。今回の『恋しくて』も、他に特に観たい映画がなかったという消極的な理由で観に行ったものであり、私にとって中江裕司作品はこれがはじめて……。

## BEGINのエッセイが原案だが……

沖縄の石垣島出身の3人組バンド BEGIN は『涙そうそう』の大ヒットで、今や『島唄』の THE BOOM 以上に有名になっている。1990年に『恋しくて』でデビューした BEGIN が書いた『さとうきび畑の風に乗って』というエッセイが、この映画の原案になっているとのこと。

もっともそのエッセイはあくまで原案だから、この映画は、BEGIN の高校時代からプロデビューするまでのサクセスストーリーを描いたものではない。『NANA』(05年)や『東京フレンズ The Movie』(06年)は、地方から東京に出て歌手デビューするまでの主人公のサクセスストーリーを軸として、若者たちの青春と友情を描いたオーソドックスな(?)映画だったが、それに比べるとこの『恋しくて』は、どちらかというとはチャメチャ……? よくもまあ、こんな思いつきの行動でここまで成長できたもの……、とってしまったが……。

## 石垣島は、何の島……?

沖縄本島や石垣島は海やサンゴの美しい島というイメージだが、THE BOOM の「島唄」でもわかるように、沖縄本島や石垣島は琉球音楽で有名。そして、私がこの映画を観てはじめて知ったのは、石垣島は「音楽の神様に祝福された島」だと言われていること。したがって石垣島には、音楽センス抜群のおじさんおばさんが多いのは当然……。

現にこの映画には、①エレキギターのうまい音楽の先生(大瀧浩一)、②マコト(宜保秀明)たちに30万円もするギターを出世払いでいいよと言って渡してやる、島に1軒しかない楽器店の店長(平良克之)、③新聞社に勤めながらバンドをやり、高校生だけのバンド大会の審査委員長(富山峯夫)など、音楽にすごい才能をもつおじさんが3人も登場する。

さらに、セイリョウ(石田法嗣)と加那子(山入端佳美)兄妹の母親澄子(与世山澄子)はピアノラウンジを経営しているが、ピアニストであった父の血を引くセイリョウがピアニストで澄子が歌手というすごい音楽一家。したがって多分音楽に関しては、加那子も潜在的な能力を持っているのだろうが、4歳の時にピ

アニストだった父親が「奄美に歌を探しに行く」と言って急にいなくなった後は歌えなくなったらしい……。

## 高1から始めても大丈夫……？

ホンモノのBEGINのメンバーである比嘉栄昇、島袋優、上地等の3人がいつからバンドを始めたのか知らないが、この映画では、ボーカルの栄順（東里翔斗）、ギターのマコト、キーボードの浩（大嶺健一）はいずれも音楽はズブの素人で、高1からやり始めたらしい……？ 私も中3の頃、ギターを買って少し練習を始めたし、大学時代にはコードを弾きながらちょっとしたフォークを歌うぐらいのことはやっていたが、所詮その程度……。また幼稚園の頃にやっていたバイオリンとか、小学校4年生からの児童合唱団の経験などを考えれば、高1まで全く楽譜も見たことがない（であろう）栄順、マコト、浩よりは私の方がまだマシだと思うのだが、栄順、マコト、浩のその後の伸びはすごいもの……。

もっとも、今私たちが聴いているBEGINの曲をイメージすると、それと比べて栄順、マコト、浩が歌う山本リンダの『狙いうち』や太田裕美の『木綿のハンカチーフ』のレベルは段違い。これなら俺のボーカルの方が……とつい思ってしまったほど……。まあ、そこらの作り方が、ドキュメンタリー映画かそれとも作りもの映画かの境目を微妙にしたこの映画の面白さ……？

## 5人のうち4人はド素人……

この映画は、ある意味で栄順、マコト、浩の3人とセイリョウ、加那子兄妹合計5人の青春群像劇だが、何とセイリョウだけがプロの俳優で、あとの4人は全員オーディションで選ばれたこの映画が初出演の高校生と大学1年生と聞いてビックリ……。中江裕司監督は、よくもまあそんなド素人を我慢して使ったものだと感心。しかし、この監督の狙いと我慢がそのとおりに出ているところがこの映画の良さとなっているから、映画づくりは面白い……？

とりわけ、どうしてもおじさんの目がいくのは加那子だが、このキャラが実に面白い。冒頭の下着姿での登場には一瞬目をむいて注目したが、それ以上の注目点は、いかにも南国石垣島の女子高生らしい独特のおなら……。と言ってもこの

映画を観ていない人にはその面白さはわからないだろうから、その面白さはぜひあなた自身の目で確認を……。初々しいセーラー服姿やりりしい空手着姿、そして若さが弾けるような私服姿やちょっぴり女らしい姿、17歳の頃の南沙織のような南国美人とは言えないものの、その個性的な姿は魅力いっぱい……。

この1本だけで終わるのか、それとも次回作に恵まれるのかはわからないが、少なくとも彼女はこの映画づくりに参加したことによって、最高の経験ができたことはまちがいない。そしてそれは、栄順、マコト、浩にとっても同じ……。

### セイリョウが消えたのにはビックリ……

この映画では、栄順、マコト、浩そして加那子の2年先輩であるセイリョウが、一種独特のキャラでオーラを発揮しているところが面白い。4人の素人俳優たちは、沖縄出身者ばかりだから、沖縄方言については問題ないが、逆にセイリョウを演じたプロ俳優の石田法嗣は、沖縄の方言では苦労したはず……？ また、1990年生まれの石田法嗣が、栄順、マコト、浩の3人よりも2つ年上の役でリーダーシップを発揮するのも少し難しかったかも……？

この映画は決して **BEGIN** の立身出世を描くドキュメンタリー映画ではなく、中江裕司監督がオリジナルな脚本を書いたものだけということは、このセイリョウの扱いに端的に表れている。すなわち、いきなり「バンドやるどー」の一声でこの映画の物語がスタートしたことからわかるように、その行動は思いつき的で天才的……？ したがってある日「ちょっと旅に……」と言ったまま突然いなくなったセイリョウの行き先は……？ そしてまた、失踪していた父親自筆の未完成の楽譜を持って帰ったセイリョウは、それをどのように完成させたのだろうか……？

そんなセイリョウを急にストーリー展開の上で消してしまった、つまり殺してしまったのが、中江裕司監督の脚本。そりゃちょっとかわいそう、と一瞬思ってしまったが……？

### 順調すぎるのが、玉にキズ……？

**BEGIN** が今のような大成功をおさめるまでの間に、どんな下積みの苦労をし

たのか私は全く知らないが、すべてが順風満帆ということはなかったはず。ところがこの映画における栄順、マコト、浩のバンドは、「セイリョウズ」時代の最初の文化祭でこそ涙を呑んだものの、その後は極めて順調。文化祭でのバンド大会が中止になったことを受けて、栄順が企画した高校生だけの八重山バンド天国で、セイリョウズ改めビギニングは見事優勝。

そして、セイリョウが「東京へ行ってレコードデビューする」と宣言していたとおり、栄順、マコト、浩の3人は高校卒業後、東京へ出かけていくことに。東京で開かれる全国大会でビギニングが歌ったのは、セイリョウが完成させた父親の遺作『恋しくて』。私が聴いていても、栄順、マコト、浩の3人の歌のレベルはこの程度かと思ったのだが、この映画ではそれでも……？ こりゃちょっと順調すぎるのでは……？

## 加那子は今……？

全国大会で見事優勝の栄冠を勝ち取ったビギニングは今、その喜びを胸に、再度『恋しくて』を歌い始めたが、スクリーン上ではそれが現在のすなわち15年後のBEGINの姿に重なってくる。ビギニングは『恋しくて』でのデビュー以来順調にキャリアを重ね、この映画の主題曲『ミーファイユア』も歌っているというわけだ……。

そこで私が観たかったのは、15年後の加那子の姿。セイリョウと加那子の母親澄子が今も生きているのかどうかは知らないが、栄順、マコト、浩と同級生である加那子も高校卒業から17年後の今は34、5歳。あの「小便たれで、屁こきの加那子」が高校1年生になったところから映画はスタートしたが、34、5歳の加那子は今どんなに……？ そんな風に構想を練れば、「恋しくて」パート2の脚本も書けそうだが……？

2007(平成19)年5月5日記